上代日本語の音韻論

Majukyi Kyigasane (Twitter@nekw0)

音韻とは

- 言語のいちばん小さな単位を繋ぎ合わせている方法。

- いちばん小さな単位：手話のchereme,　音声言語の音素など。
  日本語の音素には母音 /a/ や子音 /m, n/ などがある。

内容

- 上代日本語という段階（共時態）の音韻論

以下，時間的問題等による没案：

- 濁音の起源に関する主流派の立場→「カグロ甲シ」‘黒い’の「カ-」とはなにか
- アイヌ祖語の概説

上代日本語

- 英 Old Japanese.
- 奈良（・飛鳥）時代の（やや狭義の）日本語。
- かつては卑弥呼の時代も「上代日本語」

言語

- 近畿語

- 東国語（《萬葉集》巻十四：東歌，巻二十：防人歌）
  - →遠駿語（静岡県）
  - →真東国語（関東地方）
    - →八丈語，奈良田？
  - →中部方言（長野県）

- 半島日琉語*Peninsular Japonic*：よく知らないので論じない

東国語の特徴の例

- 日琉祖語 *ai > 東国祖語 *ə（***たまに例外あり***）

  例）*kă[n]ká:i ‘影’

  > OWJ カゲ$_2$～カガ-（cf. 鏡カガ-ミ$_1$）

  > pAdc *kaNgə

  > 真東国語 カゴ$_2$

- 日琉祖語 *ui/*oi > 東国祖語 *u?（***たまに例外あり***）

  例）*pŏi ‘火’

  > OWJ ヒ$_2$～ホ$_1$-（cf. 火中ホ$_1$-ナカ）

  > pAdc *pu?

  >遠駿語 フ

東国語の特徴

- なんで例外とか，説明不能な対応があるの？
  →母語話者が直截に記録していないから
  →日琉祖語の再構が間違っているから
  →音声的に、近畿語の表記体系で書けないから
  etc.

- **そもそも音韻対応の詳細に関する合意が形成されていない（あるいは，わたくしはその合意を認めていない）**

そのため

- ここで説明するのは，近畿語の音韻体系です。

上代近畿語の音素目録

- 1行につき，最大8段（カ行：カキ甲キ乙クケ甲ケ乙コ甲コ乙）
  →上代特殊仮名遣と呼ばれる。〈1〉と〈2〉で表すことも。

- 母音の数→不明（分析とか音声学的推定の問題；3〜8個）
- 子音の数→たぶん /k, p, t, r, s, y, w, m, n/ + /N, (っ)/ で10個

上代日本語の音素配列論

- 語末に子音はこない
  例）「フランスパ**ン**」←上代日本語では✗

- /k, p, m/（非舌面音）にはイ・エ段の甲乙の区別がある。

- /k, t, s, r, j, n, (m, p)/（非唇音）にはオ段の甲乙の区別がある。

上代日本語の音素配列論②

- 例証されていないが，恐らく促音「っ」が存在する
  ヌリテ > *ヌッテ〈奴弓〉「合図の鈴・鐘（古事記）」

  カリテ > 平安時代 カテ「食料」
  cf. ラ行四段の「テ」承接時の促音便
  （定式化：OWJ ri > pre-EMJ Q /__te#）
  ※促音を独立音素として認めないのもありうる。

- 濁音をもたらす（基底における？）音素がある
  ナニト > *$naNto_2$〈那杼〉「どういう理由で（古事記）」

上代日本語の韻律論

- アクセントは詳細不明（かなりの区別があったはず）

- おそらく音節等時制（仏語・韓国語・東北方言）
  ※英語・ロシア語：強勢等時制
  ※共通日語：モーラ等時制。

音価の推定の雰囲気

推定に使える道具

- 言語類型論

→言語全体の統計的傾向・地域的傾向と制約

- 再構

再構ってなに

- ある言語の例証されていない情報を，間接証拠から推測する

- 比較（外的）再構

→子孫・祖先との間の変化が矛盾なく説明できるのは十分条件

- 内的再構

→ある特徴が遡って説明できるのは必要条件；軌道修正できる

資料にできるもの

- 隋唐時代の中国語の音韻
  ☞現存する韻書・韻図や現代方言，梵語の音写等からわかる

- 日琉祖語
  ☞祖先との整合性が取れなければならない

- 現代本土方言・中古日本語（平安時代）
  ☞現代方言の一部は上代近畿語の子孫である

資料にできる可能性のあるもの

- 周辺言語との間の借用語（資料及び研究寡少）
  ☞古代朝鮮語，前アイヌ祖語

- 真東国語・遠駿語の音写の方法
  ☞当時は東国祖語～現代方言祖語の中間段階だったはず

子音の音声的実現

- 直前に何らかの鼻音を伴っているのが濁音だった。

- /p, t, k, s/ は語中で有声化していたと見られる。
→後のイ音便などを生んだ。

- わたくし： /s/ の有声化を認めていない（現代方言に実例がある s → [ç] / __i を主張；日本書紀α群の統計からも支持）

上代特殊仮名遣の音声的実現

- M. H. Miyake (2003) が中古音に忠実な最新の推定。
  上代 [*a, *e, *əj, *i, *ɨ, *o, *ə, *u] < 早期 [*a, *e, *əj, *i, *ɨj, *o, *ə, *u]
- だいたいの傾向：
  エ甲→相対的に前舌（[e, je]）
  イ甲→相対的に前舌（[i, ji]）
  エ乙→相対的に非前舌・二重母音的（[əj, e]）
  イ乙→相対的に非前舌・二重母音的（[ɨ, ɨj, wi]）
  オ甲→相対的に円唇（[wo, o]）
  オ乙→相対的に非円唇（[o, ə]）
  （わたくし：中期 [*ᴀ, *jᴇ, *ə, *ʲi, *i, *wΩ, *Ω, *u] < 前期はMiyake 2003体系）

さいごに

おまけ（厳密性は全く保証されていません）

発音してみましょうか？

スサノヲノミコトが詠んだ歌。日本最古とされる。《古事記》歌謡1。

※アクセントと母音は適当にごまかした部分がある。

八雲立つ出雲八重垣。｜幾重にも重なる雲のような出雲の八重垣。

*[já.gù.mò tà.dú]　*[ìn.dú.mò já.bɛ́ŋ.gá.gì]

妻籠みに八重垣作る。｜妻を隠すための八重垣を作っている。

*[tú.mɛ́ŋ.gə́.mɨ́ ní]　*[já.bɛ́ŋ.gá.gì tù.gù.ɾû]

その八重垣を｜そう，八重垣を。

*[sə́ nə́ já.bɛ́ŋ.gá.gì wô]

了

急拵えにつき，これにて終えます
ありがとうございました